

東京・春・音楽祭2020

東京春祭マラソン・コンサート vol.10

ベートーヴェンとウィーン

生誕250年によせて



第2部 ベートーヴェンと皇侯貴族のウィーン

熱烈な共和主義者のイメージとは反対に、崇拜の念を払ってくれる特権階級に対しては深い信頼関係を築いたベートーヴェン。ウィーンに縁の皇侯貴族は、彼とどのような交流をおこなったのでしょうか？

曲目解説

1814年、ベートーヴェン(1770-1827)は、しばしお蔵入りとなっていた歌劇《レオノーレ》を大改訂し、歌劇《フィデリオ》として再上演する。序曲からして、《レオノーレ》のように暗から明へ至る劇的なものではなく、きわめて祝祭的な1曲に書き換えた。劇の大詰めでも、《レオノーレ》に比べると、徳のある君主の命を受けて世界に善をもたらす使者＝貴族の位を持つ大臣の存在がクローズアップされる。

このようにベートーヴェンは、貴族社会の転覆を願う共和主義者ではなかった。むしろ徳のある貴族の下で、特権階級と市民階級が共存できる社会を理想としていた。だからこそ彼は、自分に協力的な貴族に対しては友好的だった。逆にベートーヴェンの才能に感じ入った貴族たちも、市民階級の出にすぎない彼に対し、熱烈な敬愛の念を示した。

そのような貴族の代表格に、「ヴァイオリン伴奏付きのピアノ・ソナタ」を作曲したルドルフ大公(1788-1831)がいる。彼は、名門貴族ハプスブルク家の直系でありながら、ベートーヴェンにピアノや作曲を師事し、さらには彼に財政援助をおこなった。

またベートーヴェンは、恩義を感じている貴族に対して積極的に曲を捧げたり、彼らからの依頼を受けて曲を作ったりしている。後者の例が、ウィーンで外交官として活躍したロシア出身の伯爵ラズモフスキー(1752-1836)。優れたヴァイオリンの腕前を備えていた彼は、ベートーヴェンに弦楽四重奏曲の作曲を依頼した結果、1806年に完成されたのが3曲からなる、いわゆる「ラズモフスキー 弦楽四重奏曲」だ。

ベートーヴェンと交流のあった貴族の中には、彼以外の音楽家からも曲を献呈された人も大勢いた。ベートーヴェンと同時代に活躍したメデリッチュ(1752-1835)の「弦楽四重奏のための幻想曲」は、ベートーヴェンと懇意にしていた男爵パスクアラティ(1777-1830)に捧げられている。

そうでなくても当時は、音楽の才能や愛情に溢れた貴族が少なくなかった。ボン時代からベートーヴェンの支援者であったヴァルトシュタイン(1762-1823)が作った旋律は1792年にベートーヴェンが書いた「ヴァルトシュタイン伯爵の主題による8つの

変奏曲」に刻まれている。あるいはベートーヴェンが晩年に作曲した一連の弦楽四重奏曲(いわゆる「ガリツイン・セット」)を委嘱したロシアの伯爵 N.ガリツイン(1794-1866)は、一族からして音楽的素養に恵まれていた。ロシア帝国の大臣も務めた A.ガリツイン(1773-1844)の旋律に基づく「ロマンス」は、その好例といえよう。

(小宮正安)